性・年齢別，出生年代別にみた喫煙の動向

—肺がん検診受診者での観察—

西村ちひろ*　中山　富雄*　中山　典子*
津熊　秀明*　鈴木隆一郎[2]*

わが国の成人男女における喫煙の動向を明らかにするため，大阪肺がん集団検診研究班が1981年から94年までの14年間に実施した，肺がん検診の参加者に対する問診データを用い，性・年齢階級別，歴年別，出生年代別に，喫煙状況を分析した。その結果，以下の成績を得た。

1. 現在喫煙の割合は，男女とも高齢者ほど低下した。
2. 喫煙割合は，概してどの年齢階級でも次第に減少する傾向にあったが，49歳以下の女性では逆に増加した。
3. 同じ年齢階級でも出生年代別にみると，最近生まれの者ほど喫煙割合が減少する傾向にあったが，1940～44年生まれを境に減少傾向が停滞し，特に女性では横ばいから増加に転じた。
4. 禁煙割合は，男性の40～44歳以上では最近生まれの者ほど増加したが，39歳以下では減少に転じており，一方，女性では，45～49歳以下の若年層で増加しつつあった。
5. 非喫煙の割合は，最近生まれの者ほど増加する傾向にあったが，1940～44年生まれを境に女性では横ばいから減少に転じた。

以上から，成人男性では，近年，タバコ離れが次第に進みつつあるが，39歳以下の若年者では非喫煙者の増加と禁煙者の減少が，同時に進行している可能性が推測された。成人若年女性では，喫煙割合が着実に増加していたが，禁煙割合も次第に増加しつつあると推測した。

Key words：喫煙習慣，年次推移，出生年代

I　緒　　言

日本たばこ産業株式会社が1994年に実施した全国たばこ喫煙者率調査[1]では，20歳以上の成人における喫煙割合が，男性59.0%，女性14.8%であった。経年的にみると，男性では1966年の83.7%以来漸減傾向にあるが，他の先進諸国と比べてなお高率であった。一方，女性の喫煙割合は，他の先進諸国と比べて低率であるが，全体では横ばい傾向にあり，年齢階級別には，20歳代および30歳代で最近25年間増加傾向を続け，また40歳代では，1970年以来減少していたが，1985年以降増加に転じていた[2,3]。1990年に健康・体力づくり事業財団が実施した全国健康意識調査[4]では，成人の喫煙割合は，男性59.3%，女性10.8%で，5年前の同調査と比べて男女とも喫煙割合が低下していた。1986年に厚生省健康増進栄養課が実施した調査結果[5]でも，男女とも喫煙割合が1980年の同調査に比べて低下していたが，20歳代の若年女性では，ほとんど低下がみられなかった。これらの調査結果を総合すると，わが国の成人での喫煙割合は，近年全体としては減少しつつあるが，若年女性では増加傾向にあることがうかがえる。

著者らは，大阪府における肺がん対策を推進することを主目的として，大阪府立成人病センターと大阪府立羽曳野病院の疫学および臨床の研究者から成る大阪肺がん集団検診研究班を組織し，1981年以降大阪府下7市町において，地域住民を対象とした肺がん検診を実施してきた。本研究では，この際肺がん検診受診者に対して行った喫煙習慣に関する問診の結果に基づいて，喫煙の状況を，性・年齢階級別，年次別，さらに出生年代別に観察するとともに，わが国の今後の喫煙対策の進め方についても若干の考察を行った。

* 大阪府立成人病センター・調査部
2* 大阪府立成人病センター・研究所
連絡先：〒537 大阪市東成区中道1-3-3
大阪府立成人病センター・調査部　西村ちひろ

Ⅱ　調査対象と方法

大阪肺がん集団検診研究班が実施した肺がん検診では，呼吸器症状や呼吸器疾患既往歴，職業歴とともに，喫煙習慣に関する事項を，予め定めた様式に受診者自身に記入してもらった後に，保健婦等が点検し，必要な場合には記述を修正した上で，該当者に喀痰採取容器を手渡してきた。1981年から1994年までの14年間の受診者は，延べ181,646人（男57,582人，女124,064人）であった。受診時の問診において，喫煙についての回答が無効であった164人を除外し，残りの181,452人（男57,523人，女123,929人）を解析対象とした。この内，新規の受診者は79,786人（44.0%），一度でも検診を受診したことのある経年受診者は101,666人（56.0%）であった。1995年の7市町合計の受診者は，19,922人（男5,991人，女13,931人）で，この内40歳以上は17,479人であり，国勢調査での40歳以上人口（1990年：165,365人）の10.6%に相当した。なお，この間，肺がん検診の場において，喫煙者を対象とした積極的な禁煙指導は実施しなかった。

解析対象者の喫煙習慣は，肺がん検診受診時の問診情報から，現在喫煙，過去喫煙，非喫煙のいずれかに分類し，全体に占めるこれら3区分の割合を，性別，年齢階級別および出生年代別に求めた。なお，禁煙割合は，過去喫煙者数を，喫煙歴のある者，すなわち，現在喫煙者と過去喫煙者の和で除した値とした。年齢については，問診票に記載してある生年月日を基に，それぞれの検診受診年月日現在での満年齢を計算し，表1に示す6つの年齢階級で成績をまとめた。出生年代については，1914年以前生まれから，5年きざみに1955年以後の生まれまで，10期間に区分した。

Ⅲ　成　　績

表1に，解析対象者の喫煙状況を性・年齢別に示した。39歳以下の対象者は，19歳以下が291人，20～29歳が4,974人，30～39歳が20,776人であった。肺がん検診の対象者が40歳以上なので，今回は39歳以下としてまとめて示した。男の現在喫煙の割合は，全体では59.4%で，年齢が高いほど低くなった。女の喫煙割合は，10.3%で，80歳以上を除けば，男と同様年齢が高いほど低くなった。

表2に，解析対象者の性・受診年別喫煙状況を示した。現在喫煙の割合は，男女とも受診年が最近になるほど低くなった。

図1に，現在喫煙の割合を，性・年齢別，検診受診年別に示した。なお，性・年齢階級別に算出できるほど十分な対象者がなかったので，1981年の成績は表示を割愛し，1982年から1994年までの13年間の観察期間とした。また80歳以上の対象者での成績は，70歳以上のカテゴリーにまとめて表示した。男では，どの年齢階級においても，受診年が最近になるほど喫煙割合が減少していた。女では，50～59歳，60～69歳，70歳以上の年齢階級で，受診年が最近になるほど減少していたが，49歳以下の若い年齢階級では減少傾向が滞り，特に39歳以下では1985年以降増加に転じていた。

図2には，現在喫煙の割合を，性・年齢別，出生年代別に示した。程度の差はあるが，男ではどの年齢階級でも，出生年が最近の者ほど，現在喫煙の割合が減少していた。ただし，1940～44年生まれ以降の者での減少は緩やかであった。女で

表1　解析対象者の性・年齢別喫煙状況

年齢	男						女					
	現在喫煙	%	過去喫煙	%	非喫煙	%	現在喫煙	%	過去喫煙	%	非喫煙	%
39以下	5,443	71.2	684	9.0	1,513	19.8	2,688	14.6	541	2.9	15,172	82.5
40–49	7,126	67.8	1,694	16.1	1,693	16.1	3,608	10.6	487	1.4	29,816	87.9
50–59	6,644	61.4	2,304	21.3	1,866	17.3	3,105	9.4	620	1.9	29,244	88.7
60–69	9,824	55.6	5,122	29.0	2,727	15.4	2,443	9.0	697	2.6	23,985	88.4
70–79	4,488	49.2	2,770	30.4	1,861	20.4	799	8.0	234	2.4	8,920	89.6
80以上	652	37.0	481	27.3	631	35.8	131	8.3	28	1.8	1,411	89.9
合計	34,177	59.4	13,055	22.7	10,291	17.9	12,774	10.3	2,607	2.1	108,548	87.6

表2　解析対象者の性・受診年別喫煙状況

受診年	男						女					
	現在喫煙	%	過去喫煙	%	非喫煙	%	現在喫煙	%	過去喫煙	%	非喫煙	%
1981	328	65.7	89	17.8	82	16.4	165	13.1	33	2.6	1,058	84.2
82	1,828	75.7	297	12.3	289	12.0	605	16.0	77	2.0	3,088	81.9
83	1,746	72.1	390	16.1	287	11.8	608	15.4	107	2.7	3,222	81.8
84	2,739	67.0	690	16.9	658	16.1	1,063	13.3	191	2.4	6,712	84.3
85	3,006	64.0	943	20.1	749	15.9	1,136	11.8	207	2.2	8,275	86.0
86	2,569	61.9	871	21.0	708	17.1	857	9.8	149	1.7	7,771	88.5
87	2,481	59.4	986	23.6	709	17.0	912	10.0	182	2.0	7,988	88.0
88	2,569	59.5	948	22.0	799	18.5	928	9.7	159	1.7	8,524	88.7
89	2,560	57.7	1,039	23.4	835	18.8	888	9.1	167	1.7	8,666	89.1
90	2,602	57.2	1,135	25.0	810	17.8	919	9.2	202	2.0	8,859	88.8
91	2,645	56.5	1,162	24.8	872	18.6	979	9.5	212	2.0	9,152	88.5
92	2,731	55.1	1,242	25.1	979	19.8	1,020	9.2	225	2.0	9,839	88.8
93	3,157	53.3	1,526	25.8	1,243	21.0	1,312	9.2	321	2.3	12,559	88.5
94	3,216	51.7	1,737	27.9	1,271	20.4	1,382	9.5	375	2.6	12,835	88.0
合計	34,177	59.4	13,055	22.7	10,291	17.9	12,774	10.3	2,607	2.1	108,548	87.6

図1　性年齢別・受診年別の現在喫煙割合

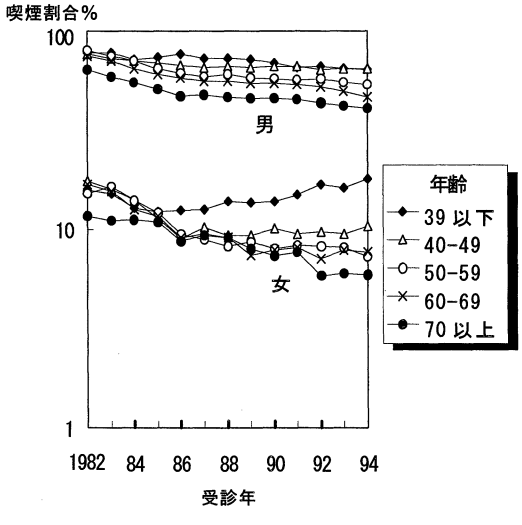
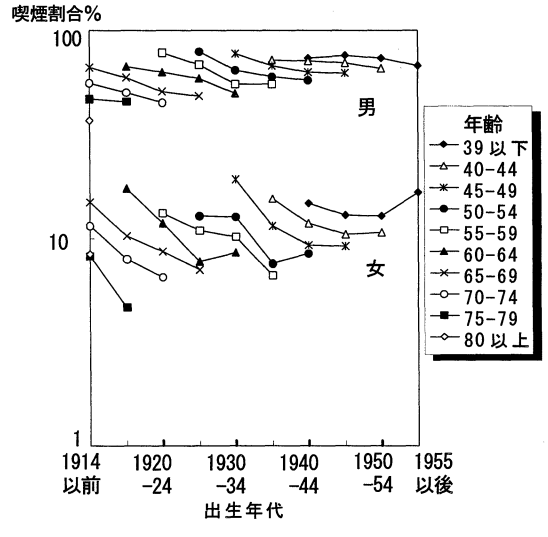


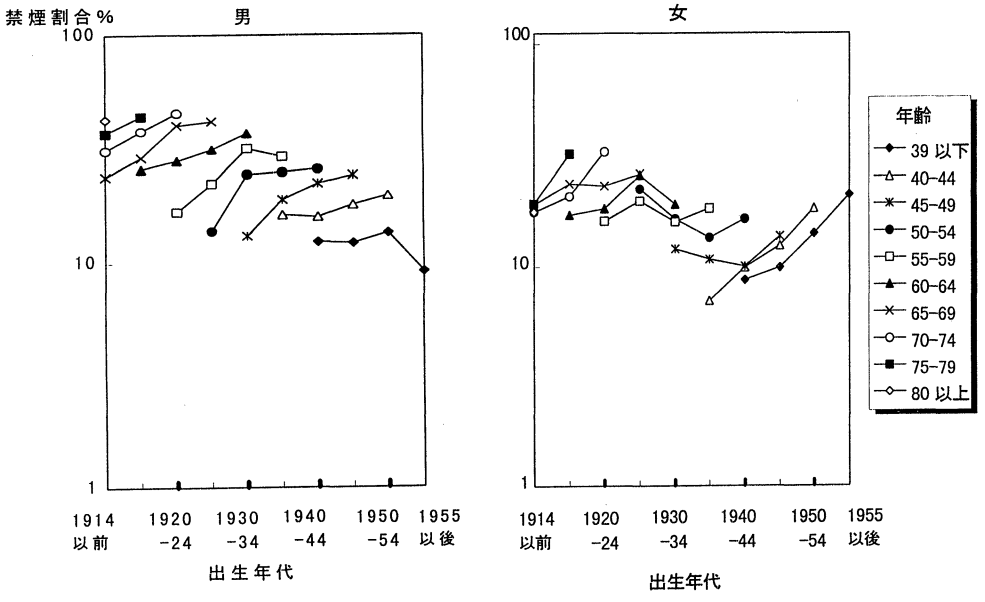
図2　性年齢別・出生年代別の現在喫煙割合



も，年齢が高い者では，出生年が最近の者ほど，喫煙割合が減少する傾向を示したが，1940～44年生まれ以降の者では減少傾向が停滞し，特に1950～54年生まれを境に，喫煙割合が増加に転じていた。

図3では，禁煙の割合を，性・年齢別，出生年代別に求め，表示した。男では，年齢階級が高いほど禁煙割合も高くなった。さらに，同じ年齢階級でみると，生年が最近の者ほど禁煙割合が次第に増加する傾向を示したが，1950～54年生まれを境に禁煙割合が減少に転じていた。女では，過去喫煙者の数が少ないため，必ずしも安定した数値が得られなかったが，男と同様，高年齢の者ほど禁煙割合が高くなった。しかし，出生年との関連では，男の場合とはやや異なり，45～49歳以下の年齢階級では1940～44年生まれ以降，禁煙割合が

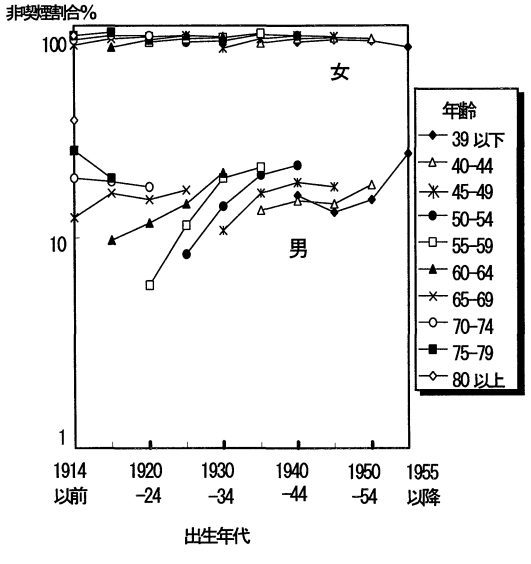
図3　性年齢別・出生年代別の禁煙割合



増加する傾向を示した。

図4には，非喫煙の割合を，性・年齢別，出生年代別に示した。男性では，同じ年齢階級でも，1940～49年生まれを除き，出生年が最近の者ほど非喫煙割合が増加する傾向を示した。女性では，どの年齢階級でもおおむね緩やかな増加傾向にあったが，1940～45年生まれを境に横ばいから減少に転じていた。また，男性では，同じ出生年代でも，高齢になるほど，非喫煙割合は増加する傾向を示した。

図4　性年齢別・出生世代別の非喫煙割合



Ⅳ　考　　察

以上の諸成績は，肺がん検診受診者において観察された結果であり，わが国の成人男女における喫煙習慣の動向を代表しているとはいえないが，性・年齢階級別の喫煙割合およびその動向については，これまでに報告された全国調査ときわめて似た成績であった。著者らは，これまでに肺がん検診受診者と非受診者の喫煙状況の違いを分析し，検診受診者の喫煙割合が，非受診者より低いこと（男では53.3%対59.8%），禁煙割合が非受診者より高く，肺がん検診の受診者は健康により関心の高い人である，という成績[6]を得ている。したがって，今回の成績は，喫煙割合を実際より低く，逆に禁煙割合を高く評価している可能性のあることを保留しておく。

今回の調査では，特に出生年代との関連において，いくつか興味ある知見が得られた。すなわち，1）現在喫煙の割合は，男性ではどの年齢階級でも最近生まれの者ほど減少しつつあるのに，若い女性，特に39歳以下では，1950～54年生まれを境に増加傾向に転じていること，2）禁煙割合は，

男性の40～44歳以上では最近生まれの者ほど増加しているのに，39歳以下では1950～54年生まれを境に減少に転じており，一方，女性では，45～49歳以下の若年層で，1940～44年生まれ以降，禁煙割合が増加しつつあること，3）非喫煙の割合が，男性では，おおむね最近生まれの者ほど増加しているが，その様相は単調ではない。特に1935～39年生まれから1950～54年生まれまでの間に波状の変化が観察された。一方，女性では，1940～45年生まれを境に横ばいから減少に転じていること，がそれぞれ観察された。

非喫煙の割合については，同じ出世年代でも，高齢になるほど高くなる傾向が観察された。今回の対象は，固定集団ではなく，肺がん検診受診者であり，表2に示したように受診年によって増減している。したがって，同じ出生年代の人でも，年齢が変わると，人の入れ替わりがあるため，非喫煙割合が変動することもあり得ると考える。そうしてこのようにおおむね増加傾向を示す原因としては，検診受診者には健康な人が多いことや，喫煙者は死亡確率が高いため対象から除かれていくこと，などが考えられるが，その影響の大きさを評価することは困難である。しかし，延べ181,452件のデータを14年間観察した結果であり，かつ各年齢階級について出生年代に沿った変化の様相はほぼ同様であるので，一般住民中の動向を反映しているものと考える。

成人男性では，近年，タバコ離れが次第に進みつつあるが，39歳以下の若年者では非喫煙者の増加と禁煙者の減少が，同時に進行している様子がうかがえた。これに対し，成人女性では，39歳以下で喫煙割合が着実に増加していたが，禁煙割合も若い年齢階級で次第に増加する傾向が観察された。こうした男女間の喫煙習慣の動向の違いは，例えば，若い女性では，一種のファッションとして喫煙を開始し，結婚・妊娠・出産などを契機に禁煙する者が多いこと，また，若い男性では，喫煙を開始し，喫煙を継続する者と，喫煙しない者とが明確に2分されつつあること，などを反映しているのかも知れない。今後，こうした推測が正しいかどうかを検証する必要がある。

1995年にとりまとめられた厚生省の「たばこ行動計画」検討会報告書の中では，たばこ対策の具体的な内容の一つに，防煙対策として，主として未成年者の喫煙開始の防止と喫煙習慣化の防止対策をあげている[2)]が，今回の調査で明らかになった出生年代の違いや性・年齢別の喫煙特性を踏まえた上で，今後の喫煙対策を的確に推し進める必要がある。

本論文の要旨は，第54回日本公衆衛生学会総会（1995. 10，山形）で発表した。

（受付　'96. 5.24
採用　'96.10.22）

文　献

1）平成6年度全国たばこ喫煙者率調査．日本たばこ産業株式会社，1994.
2）㈶厚生統計協会編．国民衛生の動向．東京：㈶厚生統計協会，1995; 98-101.
3）厚生省編．喫煙と健康―喫煙と健康に関する報告書第2版．東京：㈶健康・体力づくり事業財団，1993.
4）全国健康意識調査報告．㈶健康・体力づくり事業財団，1990.
5）厚生省健康増進栄養課：昭和61年度国民栄養調査．国民栄養の状況，昭和63年版.
6）西村ちひろ他．肺がん検診の受診状況別にみた禁煙率．日本公衆衛生雑誌 1993; 40: 53-57.